



生態と地域

Botanical & Local
in FUJIYOSHIDA



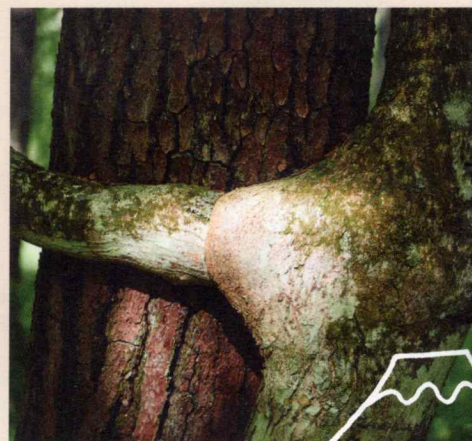
まちの可能性を広げる、 富士吉田のボタニカル。

Botanical & Local in FUJIYOSHIDA

富士山の北麓に広がる山梨県富士吉田市。富士山信仰の文化やテキスタイル産業で知られるこのまちは、豊かな植生に恵まれ、江戸時代には幕府の薬草採集地でもありました。

インスタ映えする街並みやうどんだけではない、まちのさまざまな魅力をもっと知ってほしい。そんな思いで設定した2024年度のテーマは「Botanical & Local(生態と地域)」。まちの発展を支えた要素の一つでもある豊かな自然環境に着目し、さまざまなジャンルのクリエイターの方と森や植物を五感で感じながら、ボタニカルの力、富士吉田の魅力を探ってきました。

本紙は、イベントを通して改めて掘り起こされた富士吉田とボタニカルの魅力や可能性を、たくさんの方と分かち合うために制作しました。地域の自然を深く知った上で、その生態系の一部としての私たち人間にはどのような姿勢が大切なのでしょうか。その思考のきっかけとして、ぜひ本紙をご活用ください。





富士吉田の“仕掛け人”にきく

富士吉田の「ボタニカル」を知り、 これからの自然と人間の関係性を考える。

コロナ禍によって観光客が激減したまちを盛り立てたい——そんな思いから山梨県富士吉田市で2020年に立ち上がったワーケーション誘致のプロジェクトが「SHIGOTABI」です。

2023年からは「考える人の、旅。」とコンセプトをリニューアルし、地域の魅力を再発見するためのイベントを企画・運営しています。

今年度は「Botanical & Local」をテーマに、文芸、酒、食、香りの領域で注目の5組のクリエイターと協働し、富士吉田の土地に根差した自然環境に足を踏み入れて生態系を知り、自然と人間の関係性について考える体験型のイベントを実施しました。

クリエイターの視点で富士吉田のボタニカルを捉え直すことにより、富士吉田の新たな体験価値を発掘することができました。そのプロセスの一片を手にとっていただいた皆さんにも感じていただけたらうれしいです。



クリエイターから見た富士吉田



人間と自然のより良い関係性を、
短歌を通して考える

◎ 歌人・エッセイスト 上坂あゆ美さん

参加者の皆さんが短歌を制作する前、富士山麓のネイチャーガイドとして活動している松村岳史さんに、富士吉田の自然環境や生態系について教えてもらいながら森を散策しました。松村さんは、視覚だけではなく、嗅覚や聴覚などの五感を使って森を歩く方法を私たちに教えてくれたので、参加者の皆さんは短歌を制作する上での着眼点の幅が広がったのではないかと思います。

実際に歌会で披露された短歌には、東京のファミレスでつくったら出てこないような着眼点や言葉選びが多く、作者個人の視点や言葉で表現されている作品ばかりでした。また、私自身も「森の中にある全ての自然物には土壌を形成するための役割があり、生態系は長い時間をかけてできあがる」という松村さんのお話が印象に残っていたので、そこからインスピレーションを受けて一首つくりました。

気候変動問題のようなテーマを考える際、植物や動物だけの存在を尊び、人間の存在を蔑ろにしすぎてしまうことに疑問を抱いていました。しかし、人間の暮らしと密接につながる短歌を通して自然との関係性を考えると、その存在を必要以上に卑下したり無視したりせずに自然と向き合うことができると実感しました。



上坂あゆ美さん／歌人、エッセイスト。1991年生まれ。静岡県出身、東京都在住。2022年に第一歌集『老人ホームで死ぬほどモテたい』を刊行。ニッポン放送『オールナイトニッポン0』でパーソナリティを務めるなど、メディア出演多数。

富士山麓 ネイチャーガイド 松村岳史 さんに聞く

? 自然と共生するために、
私たちはどのような意識を持つべき?

Q3

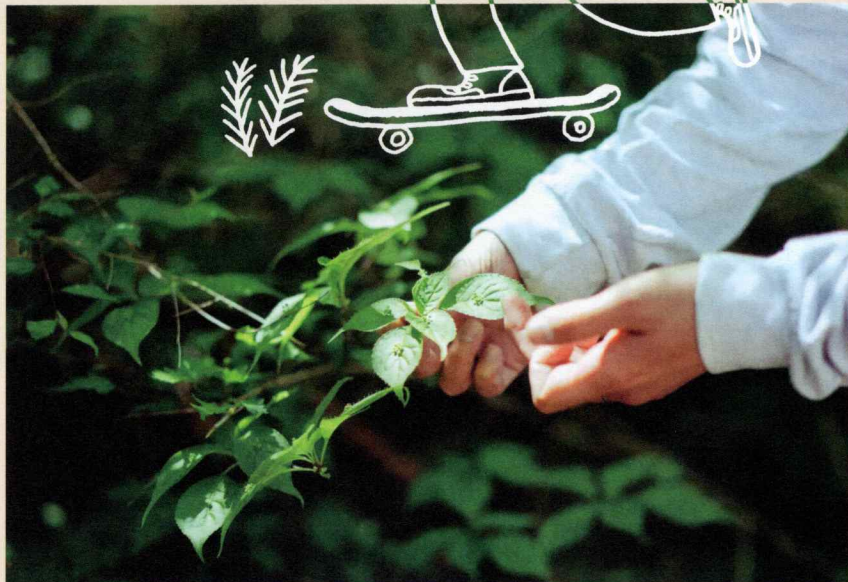
自然を守るには
人間は関わらな
い関わり方

野生植物の価値を再解釈し、 広がるハーブの可能性

◎ HERB STAND 平野優太さん

HERB STANDの活動では、主にハーブの生産と供給をしていて、生産方法は大きく2つあります。1つ目は耕作の用途で使われなくなった農地での自家栽培、2つ目は富士北麓に自生している野生植物の収穫です。特に後者の場合には、ハーブを広義に捉える意識を大切にしている、食べられないという判断がされている植物でも、たとえば染め物の色素として使ってみるなど、食用以外の価値で人への有用性を見出す視点を持つように心がけています。

この視点には、私が学生時代から夢中になっていたスケートボードの経験が生かされていると思います。スケーターは、スケートボードのために作られていない都市の大小さまざまな建造物を自分たちの遊び道具として見立て、スケーター以外の人たちにとってはなんでもないように思われるものの価値を再解釈します。同じように、私自身がいろいろな植物をハーブに見立てて新しい価値を見出した瞬間はとてもうれしいです。山にはほぼ毎日入りますが、少しでもその環境に順応して自然とコミュニケーションをとりたいので、服装はできるだけ自然の色合いに馴染むものを着たり、歩き方は四足歩行の獣たちを真似してつま先でそっと歩いたり、行動や振る舞いを意識的に変えています。



「HERB STANDの平野優太と森を歩く / 植物をテイスティングと食から知るワークショップ」(2024/7/21開催)



平野優太さん / HERB STAND 代表。富士吉田で自家栽培のハーブを生産するほか、富士北麓の野生植物を収穫してハーブとしての価値を見出すなど、そのポテンシャルを日々模索し、レストランのシェフや植物療法士などへ幅広く届けている。



自然と共生するために、 私たちはどのような意識を持つべき？



松村岳史さん／1992年生まれ。
静岡県出身。富士宮市在住。
UNITED代表。富士山北麓を拠点に、フリーランスガイド、自然体験等のプロジェクト、バーマカルチャードesignerとして活動中。

Q1

自然との距離感がある都市部に暮らす人が、
自然環境に入るとき、どんな心構えが必要ですか？

弱肉強食という自然界の掟の中で、人間の快適な暮らしを妨げる動植物などから身を守るために生まれたものが「都市」です。ですからその安全な場から外に出て、レジャーや観光目的で自然環境に足を踏み入れるのであれば、危険と隣り合わせになるという意識を持たなければなりません。熊や猿などはそのイメージがつきやすいですが、人間への危険性が想像しづらいものも多数存在します。また、私たちがほかの動植物にとって危険な存在になり得るということにも意識を向けましょう。



Q2

知らず知らずのうちに富士吉田の自然環境に悪い影響を与えてしまわないよう、注意するべきことはありますか？

世界文化遺産である富士山は、国立公園にも指定されています。その山麓に位置する富士吉田は都市と自然の境界線が曖昧な地域なので、自然環境と共に生活していくための知識や行動が大切です。その土地の自然環境と付き合うときに、私たち人間の都合だけでなく、自然の都合にも耳を傾けてほしいと思います。人間が「危険だ」と感じる動物が人里にきた際には、怖いという感情で思考停止せずに、なぜ来ているのか、いま何が山で起きているのか、少し立ち止まって、思いを馳せてみるだけで、自然への理解が深まるきっかけになります。関わりの第一歩としても、人間も富士山周辺の自然環境に入る際には、生息している動植物を持ち帰ることや、餌付けをしないこと、子育て期・冬眠期の動物に不用意に干渉しないこと、スピードの出し過ぎで、交通事故で死なせないなど、最低限の自然と人間の距離のマナーを、まずは心がけましょう。

Q3

自然を守るには、
人間は関わりがない方がいいのでしょうか。
良い関わり方はないのでしょうか？

一言で「自然」と言っても、土地や地域、動植物の個性や特徴などは実に多様です。自然と人間の関係性を築くには、それらをよく知ることが必要です。自然にとっては、人間が関わらない方がよいのではという意見も耳にしますし、逆に人間にとっては、野生の動物は病原菌を持っていることが多く、植物は人間にとって不快なものをもたらすこともあるので、知識がない場合は自分の身を守るために、近づかないことや触らないことも一つの関わり方です。しかし、自然と人間は、関わり合いながら共生していく方法もあります。ある程度は人間が自然に介入し、そこでの原体験をふまえながら適切な行動を議論し、実践し続けることです。それは自然にとっても人間にとっても価値のあることだと思うのです。



